

ルカによる福音書24章36-43節 「よみがえった体」

1A 生ける希望

1B 復活の確証

2B 罪と死の敗北

3B 新しいいのち

2A 恐れる弟子たち 36-37

1B 失望に終わらない希望

2B 罪から来る恐れ

3A 魚を食べるイエス 38-43

1B からだのよみがえり 38-39

2B 手足にある傷跡 40

3B 交わり 41-42

本文

主の復活を祝う日は、私たちキリスト教会にとって最も大きな出来事と言えます。イエスが、約束の救世主、キリストとして来られた方が、十字架につけられて死に、墓に葬られました。ところが、三日目によみがえり、弟子たちの中に現れ、ご自分が生きていることに確かにされました。そして天に昇られて、今は、神の右の座に着いています。そして、やがて天から戻って来られます。

1A 生ける希望

このことを使徒ペテロは、「生ける望み」と言いました。「I ペテ 1:3b 神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」希望といっても、何か、確かでないものに期待をかけているわけではありません。心を和ませるから、神話でも何でもいいから信じていけばよい、というものではありません。イエスが死者の中からよみがえった、ということが事実であり、歴史の中で起こったことだから、「今も、イエスは生きておられる」という希望を抱いているのです。その方がおられるから、今の私も生きています！そして、やがて来られて、すべてを変えてくださいます。

1B 復活の確証

日本では、イエス・キリストについては彼が存在していたのかさえ疑って、神話のように見ている人たちが多くいます。けれども、世界に出れば逆転してします。世界では、織田信長の名前はほとんどが知りません。でも、逆にイエス・キリストは知っています。イエスがいたかないか分からないということは、織田信長がいたかどうか分からないという以上に、滑稽に聞こえます。イスラエルに行けば、イエスの生涯にまつわる場所が今も、遺跡で残っています。今のイスラエルで、この方がおられたということを否定したら、笑われてしまうでしょう。

でも、人は、復活なんてあり得ないと思います。科学で証明できないから信じられないと言います。自然科学では当たり前ですね、証明のしようがありません。実験ができないからです。けれども、法学においてはいかがでしょうか？事実であるかどうか、起こったことがどうかは、裁判の法廷で判定されます。それは、証拠や証言に基づいており、再現ができなくとも、起こったこととして認められるのです。復活の証拠というのは、こういうものです。あまりにも膨大な文献と、その中にある証言に基づいています。

そして何よりも、イエスの復活を信じた者たちが、その人の人生が変えられることなく終わらないということです。人を 180 度変える力を持っています。その新しい人生を歩んでいる人々が集まっているのが、キリスト教会です。一人一人の話を聞けば、一冊の本になるでしょう。それは、キリストが自分を生かした証言だからです。

2B 罪と死の敗北

キリストのよみがえりは、私たちを生かす希望です。聖書によれば、世には、罪があります。神が初めに造られた人、アダムが罪を犯したからです。そして世界に罪が入りました。そして、罪を犯したので、死も入りました。罪と死が世界を支配しています。自分が完璧に生きているという人は、存在しません。また、死なない人もいないですね。そんな完璧でない、死なないなんていうことを望みこと自体がおかしいと思うでしょう。けれども、死ぬことを満足している人がどれだけいるでしょうか？愛する人が死んだら悲しみます。人が死ぬのは当たり前だとして認めていても、それでも、なぜ死があるのか？と叫びたくなるのです。それは、元々が、死がなかったからというのが聖書の答えです。

3B 新しいいのち

しかし、イエスは十字架の上で死なれてから、三日目によみがえりました。十字架はローマへの反逆や殺人など、重大な罪に対する死刑の手段です。敢えて苦しんで死ぬための極刑です。それをイエス様が受けられましたが、彼は何も悪いことをしていませんでした。それでも死なれたのは、なぜか？聖書は、私たち人間が受けなければいけない、自分の罪の罰をイエスが身代わりに十字架で受けたのだと教えます。しかし、主は自分の罪のために死なれたのではないです。そのことを明らかにするために、主はよみがえられました。神がよみがえらせました。

このことによって、新しいいのちが始まりました。アダムによって罪と死が入りましたが、キリストによって、義といのちが入りました。この方信じ、受け入れる者は、神の恵みによって、新しいいのちを得ることができます。キリストにある者が、キリストのいのちを受け継ぐのです。それは、死んでもなくなるいいのちです。そして、死んだ体をもよみがえらせるいのちです。キリストを信じる者は、キリストがよみがえられたように、死んでも復活する希望が与えられます。そして、世界は今、うめいています。天と地がうめいています。人々は戦争をし、困難の中にあります。しかし、主が戻って来られて、この地を立て直して下さり、正義と平和に満ちた神の国を建てられます。そし

て、この天地をすべて変えて、新しくされて、永遠の住まいに入れてくださいます。

それでは、実際に、イエスがよみがえられた後の話を読んでみましょう。ルカ 24 章 36-43 節です。「³⁶ これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。³⁷ 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。³⁸ そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。³⁹ わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」⁴⁰ こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。⁴¹ 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。⁴² そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、⁴³ イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。」

2A 恐れる弟子たち 36-37

これは、弟子たちが集まっているところに、イエスが真ん中に現れたところの場面です。弟子たちは、非常に恐れています。弟子たちは、この方が復活したことを信じられていませんでした。

イエスは、ご自分が十字架で殺されても、よみがえることについても、まだ死なれる前から弟子たちに、何度も、はっきりと話していました。「9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。」けれども、弟子たちの頭の中に入っていませんでした。私たちは、あまりにも自分たちの想像を超えてしまっていることは、頭の中を通過しています。音としては聞こえているでしょう、言葉としては理解していますが、けれども、それが事実として理解することもできていないことでしょう。けれども、イエス様はそのまま、これからこのことが事実として起こることを語っていたのでした。

そして、イエスは十字架に付けられます。弟子たちは、イエスが捕えられる前に逃げてしまいました。唯一、途中までついていったペテロも、主がユダヤ人の裁判で裁かれている時に、近くにいる人に、「あなたも、あの人の仲間でしょう。」と言われただけで、「あんな人は知らない」と三度も呪ってしまいました。そして、十字架という惨い極刑を受けて、死なれ、その日のうちに墓に葬られたのです。それがおそらく金曜日だと思われれます。

その三日目の日曜日、明け方早く、女たちがまず墓に行きました。ユダヤ人の埋葬は、その遺体を岩の穴の中に入れて、それを長い期間かけて腐敗させて、残ったお骨を箱の中に入れると言うことをしていましたが、三日経っているので、その腐敗臭を消すために香料を携えて墓にやって来ました。ところが、遺体がありませんでした。そこに、天使がいたのです。そして、イエスが、甦られたと言いました。それで、弟子たちに女たちは全て報告したのです。けれども、「24:11 この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。」とあります。

そして二人の弟子が、エルサレムから離れて、エマオという村に向っていました。なんとそこに、生き返ったイエスが共に歩かれました。彼らはイエスだと気が付きませんでした。イエスは、「心が鈍い人たち」と言われて、聖書から、ご自分について書いてあることを説き明かされました。それで弟子たちと同じ宿に泊まれ、パンを裂いて渡された時に、彼らはこの方がイエスだと分かりました。けれども、その場で姿が見えなくなったのです。それで、そこからすぐにエルサレムに引き返ってきて、興奮しながら、自分たちがイエスを見たと言ったのです。そしてペテロも、イエスを見たと報告しました。その時に、です。イエスが彼らの真ん中に現れたのは。

1B 失望に終わらない希望

36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。³⁷ 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。

イエスが現れたのですから、生き返ったという事実を受け入れると思いきや、そうではなく、脅えて震え上がり、幽霊を見ていると思いました。なぜ、そうなってしまったのか？弟子たちには恐れがありました。いろいろな恐れや不安があったでしょう。

一つは、他のユダヤ人を恐れる恐れです。自分たちは、この方こそイスラエルを解放される方だと望みをかけて、すべてを捨ててお供していました。ところが、解放どころかユダヤ人の祭司長たちは、イエスを死刑にするためにローマ当局に引き渡してしまったのです。自分の全てをかけて付いてきた方が、死んでしまったのです。こんなに恥ずかしいことはありません、そして偽の救世主についていったカルトの信者であるかのように見られ、また物理的な危害を加えられる、あるいは逮捕されるかもしれません。それで恐れていたのです。しかし、私たちも人生の中でそういった恐れはないでしょうか？自分がこれだと思って、命かけてやって来たことが、全くの的外れであったかのように軌道を外してしまいました。自分が「これだ」と思って、自負をもってやって来たことが、脆くも崩れ去ってしまったのです。面目を大きく失っていますから、絶えずそこに触れられると過敏に反応し、恐れ、脅えている自分がいます。

2B 罪から来る恐れ

もう一つは、イエスご自身を見捨ててしまった引け目です。イエス様は、最後の晩の食事で、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」と言われた時に、弟子たちはたいへん悲しんで、一人ひとりイエスに、「主よ、まさか私ではないでしょう。」と言い始めた、とあります(マタイ 26:22)。そして、互いに対しても「お前ではないか。」と言い合いにもなりました。自分たちの中に、自分はイエスを裏切ってしまうのではないか？という引け目があったのです。どんなにイエス様を愛していても、その愛している方を裏切ってしまう自分の悪があると気づいていたのです。

そして事実、イエスが捕えられた時に、さっさと逃げてしまいました。それで、イエスが現れた時に、彼らは脅えたのです。まるで自分を呪い襲って来る幽霊であるかのように。かつて、サウルと

いう王が主に背いて魔女に伺いを立てましたが、そうしたらなんと、自分の恩師であった、もう既に死んだ預言者サムエルが出てきました。そのサムエルはサウルに死ぬことを宣言し、それで死んだように彼は堅くなってしまいました。まさに、そのように亡霊が出てきたのではないかと恐れたのです。このような不安も、私たちは多かれ少なかれ持っていないでしょうか？自分が抱えている引け目から、実体はないのにあるかのようにおびえてしまうことです。

そのことを全てイエス様はご存知です、なので、イエス様が現れた時の第一声は、「**平安があなたがたにあるように**」だったのです。まず、イエスは、彼らの希望が失望に終わっていないことを示し、平安を与えようとされていました。そして、彼らのご自分を見捨てて逃げたことについて、もう赦しておられること、愛してやまないことを知らせようとしていました。今、皆さんにもイエス様は平安を与えたいと願っておられます。自分が行なってきたこと、そこにある引け目、やましさ、また自分がやってきたことが裏切られた、失望に終わってしまっていることを取り除きたいと願われています。次に、罪を赦していることをお示しになりたいと願われました。彼らに裁きの宣告をするのではなく、確かにあなたがたの罪を受けた。しかし、あなたがたを赦していることを示したかったのです。

3A 魚を食べるイエス 38-43

1B からだのよみがえり 38-39

³⁸ **そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。
³⁹ わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」**

イエスのご自分が亡霊ではないことを、手と足を見せて確かめさせました。イエスの復活された体は、戸が閉められていてもその中に入ることのできるのですが、けれども同時に、血肉を持っていたのです。このようにして、まだ受け入れられていない事実を受け入れさせ、平安を与えようとされています。

今、見てはいないけれども、イエスが生きていると信じている者たちから、どのようにしてイエスが生きておられることを確かめることができるのか？それは、その人が確かに主の言われているように動いて、行動して、確かめるようにしてその信仰を示すことによって、相手は確かにイエスというものは生きていると確認できるでしょう。復活信仰というのは、概念ではありません。イエスがからだを持っているように、私たちの目に見える生活のど真ん中にイエスがおられることを証しているのです。復活を信じているそれぞれの生活から、具体的に現れ出て来るものです。

2B 手足にある傷跡 40

⁴⁰ **こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。**

この手足には、釘の刺された跡があります。弟子たちにとっては、その跡を見ながら、なおのこと生きているイエス様を見て、深い慰めを受けたに違いありません。その釘の後は、惨い極刑の跡です。重罪に対する処罰です。罪犯した者たちのために、身代わりになって死なれた跡だったのです。すなわち、釘の跡は、「わたしは、罪の後処理を全て終わったのだよ。もう、あなたの罪は過ぎ去ったのだよ。」と太鼓判を押してくれているのです。なんと大きな慰めでしょうか、イエス様は罪を赦され、赦しただけでなく、全く罪を犯していなかったかのように、自分に接してくださるのです。

3B 交わり 41-42

⁴¹ 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。⁴² そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、⁴³ イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。

見てください、弟子たちは恐れ、脅えていたところから、「喜び」に変わりました。今、話した、自分たちの希望が失望に終わっていなかったということ、イエスが自分たちの負い目を全て取り除いてくださったことを、瞬時に見せてくださったからです。

けれども、今度は別の疑いが出てきました。「あまりにも、美味すぎる」ということです。あまりにもすばらしい事実なので、信じられないということです。けれども、このことをも克服しないといけません。あまりにも素晴らしい話を、あまりにもすばらしい話のまま、受け入れないといけません。神の愛、神にある希望、これは、私たち人間の世界には全くないものであり、それゆえ、恐れ多くて受け入れ難いと思ってしまう。けれども、受け入れてください！ そうすれば、心の中で大きな変化が起こるでしょう。自分には全くなかった、自分には全くできなかったこと、心の一新が起こり、そして自分が変えられた人、生まれ変わる人になります。

イエス様はそして、焼いた魚を彼らの前で食べられます。イエスがよみがえってから食事を一緒にされたのは、これだけではありませんでした。先ほどの二人の弟子とも、パンを食べておられましたし、また後に、ガリラヤ湖畔で朝食に魚とパンを用意されていました。食事をしている時に、いかがでしょう、何か深刻なことを話せるでしょうか？ 喧嘩ができるでしょうか？ いいえ、文字通りお腹に食べ物が入らなくなります。食べているということは、そのまま腹を割る、平和な状態を表しています。そして、互いに心を分かち合う時です。ですから、主が甦られたのは、私たちと平和また交わりを持つためです。

主イエスをどうか、心に受け入れてみてください。今までのあり方を思い改めてください。そして、自分の罪がその手足の釘の跡にあることを見てください。それでも、平安あれと言われて、すべてを赦しておられるイエスを見てください！ そして、希望のない生活から、希望に満ち溢れた人生に変えられてください。